

困難な歴史を展示する博物館における 教育の意味の再考

— 記念的博物館教授学から見える日本の博物館の課題を手掛かりに —

金 鍾成・迫 有香・劉 旭・大岡慎治
後藤伊吹・露口幸将・溝口雄介・和田尚士
(2024年10月9日受理)

Reconsidering the Meaning of Education in Museums Exhibiting Difficult Histories:
Focusing on the Problems of Museums in Japan That Discovered by the Analysis based on
Commemorative Museum Pedagogy

Jongsung Kim, Yuka Sako, Liu Xiu, Shinji Ooka, Ibuki Goto, Yukimasa Tsuyuguchi,
Yusuke Mizoguchi and Naoto Wada

Abstract: This research aims to reconsider the meaning of education in museums exhibiting difficult histories by analyzing their exhibition utilizing Julia Rose's (2016) commemorative museum pedagogy (hereafter, CMP). Five museums in Japan were analyzed based on the "5R" (Reception, Resistance, Repetition, Reflection, and Reconsideration) of CMP, which is the response pattern of visitors at the museums, and the "toolbox" (Other, Face, Real, and Narrative) of CMP, which is a collection of tools that the museums utilize to deliver their message to their visitors and that visitors can use to create their ethical representation of the difficult histories. The result shows that the case museums in Japan effectively delivered their messages to their visitors; however, they did not provide enough opportunities for visitors to critically understand the exhibition of the difficult histories. Although the museums played educational roles in a society by suggesting the excavation of unheard voices and stressing the importance of living alongside others with different narratives focused on social justice, they can expand their educational roles by including the "possibility of criticism" in their exhibitions. In detail, they can intentionally exhibit difficult histories with the nuance that the museum's exhibition is a way of interpreting history so visitors can critically understand it. Also, the museum can provide educational programs in which visitors can debrief their museum observations and ethically represent their understanding of difficult histories. When designing their programs, museums can utilize CMP and the CMP-based analysis of the five museums from this research as a reference. Finally, other agents, such as schools and education-related NGOs, are utilizing museums as learning materials; by collaborating with them, museums can expand their educational roles further.

Key words: Difficult Histories, Commemorative Museum Pedagogy, Kyozaï Kenkyuu, Ethical Representation

キーワード：困難な歴史、記念的博物館教授学、教材研究、倫理的再現

I. 問題の所在

他者とともに生きる市民を育てる教育内容として困難な歴史 (Difficult Histories) に注目が集まっている (小野, 2021; 金・小野, 2022; Epstein & Peck, 2020; Gross & Terra, 2020; Harris et al., 2022; Stoddard et al., 2017)。困難な歴史は、人々が理解に困難を感じる歴史を指す。具体的には、ホロコースト、日本の植民地支配における強制労働、広島・長崎での原爆投下など、社会のトラウマになっており、その理解に認知的・感情的な困難が生じる歴史 (内容的定義)、またこれまで聞こえてこなかった個人や集団の声に耳を傾けることで、社会のなかで複数の語り競争することになり、その出来事をどのように記憶すれば良いかに関する倫理的判断において困難が生じる歴史 (方法的定義) を意味する (金・小野, 2022)。社会の主流の語りに対して異議を申し立てる困難な歴史は、隠されていた異なる語りを持つ他者の存在を浮き彫りにする。困難な歴史は、学習者を異なる語りを持つ他者に会わせ、彼らとともに生きるために困難な歴史をどのように記憶すれば良いかを考えること、すなわち他者を含む「私たち」の新たな集合的記憶を創造することを求める。

博物館¹は、困難な歴史をとおして社会の集合的記憶を組織的に作り変えようとする役割を担っている (柴田, 2012; 安川, 2012; Segall, 2014; Simine, 2013; Simon, 2011; Reynolds & Blair, 2018; Rose, 2016)。困難な歴史を展示する博物館は、社会において記憶される必要がある困難な歴史を発掘し、その歴史に関する研究成果を踏まえながら特定のメッセージを発信する展示を行う。そうすることで、これまで聞こえてこなかった異なる語りを持つ他者の声に耳を傾ける必要性や、彼らとの共存を呼びかけるという社会の教育機関としての役割を果たしている。しかしながら、主流の語りに対する代案の提示という博物館の方向性があまりにも鮮明であるがゆえに、その博物館の語りとそれにもとづくメッセージを教育的に吟味する機会を十分に提供できていないという課題を抱えている (中村, 2010)。

これまでも類似の問題意識を持った研究者や実践家は、歴史博物館の教育的活用に関する議論を行ってきた。展示に対するメタ分析 (服部・関戸, 2020)、展示に関する対話 (君塚, 2017)、博物館の語りの解体と再構築 (金, 2020) など、博物館に対する子どもの主体的で批判的な理解を促すためのアイデアが提案されてきた。しかしながら、それらのアイデアを提案する前の段階の作業、すなわち困難な歴史を展示する博

物館の語りやそれにもとづくメッセージを読み解く方法はいまだにブラックボックスになっている。

そこで、本研究では、困難な歴史を展示する博物館の語りとそれにもとづくメッセージを読み解き、その成果を教育的に活用する方法として Julia Rose 氏が提唱した「記念的博物館教授学」(Commemorative Museum Pedagogy) を紹介し、それを活用した5つの博物館の分析結果を示す。そうすることで、困難な歴史を展示する博物館を教育的に活用しようとする教育者には教材研究の方法とその具体例を、また来館者を含む学習者には困難な歴史を展示する博物館を主体的で批判的に吟味する方法とその具体例を提案する。最後に、上記の成果をもとに困難な歴史を展示する博物館の教育的役割を一層拡張させることを試みる。

(執筆: 劉旭・金鍾成)

II. Julia Rose 氏の記念的博物館教授学

黒人奴隷制のもとで運営されたプランテーションの歴史を展示する米国のウェスト・バトン・ルージュ博物館の館長を務める Julia Rose (2016) 氏は、著書『Interpreting Difficult History at Museums and Historic Sites』において、抑圧され犠牲となった個人や集団の歴史を記念し、学習者の反応を考慮しながら困難な歴史の倫理的再現に取り組む教育的アプローチとして「記念的博物館教授学」(以下、CMP) を提唱した。CMP は、これまで聞こえてこなかった声に耳を傾け、博物館を媒体に社会の集合的記憶を再構築すること、また学習者を社会の集合的記憶を再構築する主体、すなわち倫理的判断を行いながら困難な歴史を理解・再現する主体として育成することを目的とする。

CMP は困難な歴史に出会う学習者の内面を理解する部分と、学習者が困難な歴史をどのように理解・再現すればよいかを提案する方法の部分に分けられる。Rose 氏は、学習者が困難な歴史を展示する博物館において経験する価値観および認識の喪失・変化・ズレに注目し、学習科学および精神分析学の知見を借りながら CMP を構築した。学習者が困難な歴史と出会う際に感じる認知的・情意的な困惑感を「学習における喪失」(Loss in Learning) と捉え、既存の知識や経験で困難な歴史が理解できない困惑感を学習の始まりとして肯定的に評価した。また、このような困惑感をもたらす学習者の抵抗などの反応を認めた上で、その反応を避けるのではなく、それを積極的に観察し教育的に活用することの重要性を述べた。

Rose 氏は、精神分析学の知見を参考に、困難な歴史を展示する博物館において学習者が示す反

応を理解するための枠組みとして「5R」(受容: Reception, 抵抗: Resistance, 反復: Repetition, 省察: Reflection, 再考: Reconsideration)を提案した(表1)。これらの5つのフェーズは直線的・連続的なものではない。学習者の既有的知識や経験によって困難な歴史と出会う反応の経路は異なる。よって、5Rを参考に学習者の反応のフェーズを捉え、その時点で必要な教育的介入を行うことが重要であると主張した。

表1. CMPの「5R」

受容	困難な歴史とその再現に関わる必要性を感じるフェーズ。
抵抗	困難な歴史の再現に対して、認知的・情意的な困惑を感じるフェーズ。言葉による反論、首を振る、その場から立ち去るなど、外見的反応が観察される。
反復	学芸員に繰り返し説明を求めたり、展示物に戻ってラベルを何度も読み直したりするなど、理解できないことを理解するために努力するフェーズ。
省察	困難な歴史の再現によってもたらされる新しい発想や思考を熟考し、困難な歴史とそれを理解・再現する自身との関係について考えるフェーズ。
再考	上記の「省察」にもとづき改めて困難な歴史について考えながら倫理的再現を行うフェーズ。

学習者が困難な歴史をどのように理解・再現すればよいかに関しては、「4つのツールボックス」(顔: Face, 現実: Real, 語り: Narrative, 他者: Other)を提案した(表2)。博物館の語りとそのメッセージを主体的で批判的に理解するためには、博物館のデザインの「文法」を把握する必要がある。また、学習者が倫理的判断を行いながら困難な歴史を再現する際にも、どのような「文法」で再現すればよいかに関して案内する必要がある。そこで、Rose氏は、困難な歴史を展示する博物館を主体的で批判的に理解することを促すために、また困難な歴史に対する学習者の倫理的再現を支援するために4つのツールボックスを提案したといえる。

表2. CMPの「4つのツールボックス」

他者	困難な歴史を経験した主体、もしくはこれまで歴史的表現から排除され、また語られてこなかった人物や集団を指す。
----	---

顔	「他者」との対面、すなわち困難な歴史を経験した人物や集団との存在論的な出会いを意味する。エマニュエル・レヴィナスの「顔」という概念に由来する。
現実	人工物(もの)、画像、文書、数字、日付などの過去に関する経験的証拠を指す。歴史に妥当性を与えるが、それ自体の不完全さを前提にする批判的検討が求められる。
語り	博物館の全体のナラティブ、展示品とその説明(ラベル)、展示品の配置など、出来事に関する物語や説明を指す。「顔」と「現実」を結び付ける役割を果たす。

Rose氏は、先述の5Rと4つのツールボックスとを適宜掛け合わせることで、学習者が安全な空間のなかで困難な歴史の再現に関わる倫理的責任について考えることを意図した。そうすることで、学習者の道徳的感性を形成し、学習者が過去、現在、未来という時間軸のなかで困難な歴史の再現を取り巻く社会正義の問題について考えるように支援したのである。

(執筆: 迫有香・金鐘成)

Ⅲ. 研究方法

本研究は、CMPを紹介するための文献研究と、CMPを活用した5つの博物館を分析する事例研究にわかれる。まず、文献研究に関しては、Rose(2016)氏の著書『Interpreting Difficult History at Museums and Historic Sites』を軸に、その文献に引用されている参考文献にも触れながら、Ⅱ章のCMPの定義、方法、社会的意味を抽出した。事例研究に関しては、実際に困難な歴史を展示する博物館に訪問し、CMPにもとづいて考案した以下の手順で分析を行った。なお、この手順は、Ⅳ章の事例分析のまとめ方にも反映されている。

- ①: 博物館の広報資料(リーフレット、ガイドブック、ホームページなど)から博物館を設立した主体や設立の意図を把握し、博物館が発信するメッセージを把握する。
- ②: 4つのツールボックスを活用して、博物館がメッセージを発信する展示方略(レトリック)を捉える。具体的には、⑦どのような「他者」に出会わせているか、④「他者」と「他者」が経験した困難な歴史がどのような語りの構図のなかで記憶・再現されているか、⑨「現実」は「語り」をどのようにバックアップしていて、どのように「他者」

の「顔」を鮮明に示しているか、という質問に答える。

- ③：②で明らかになる展示方略と5Rを掛け合わせ、学習者に展示をどのように読み取ってほしいかという博物館の意図を把握するとともに、博物館が学習者による困難な歴史の再現をどのように促しているかを分析する。

分析対象である5つの困難な歴史を展示する博物館を選定する際には、「他者」の多様性を考慮した。博物館がどのような「他者」に注目するかは、博物館の展示の方向性を決定するとともに、博物館のメッセージにも影響を及ぼす。そこで、できるだけ多様な「他者」を紹介し、日本における困難な歴史を展示する博物館を分析する際に参照事例として活用してもらうことを目指した。しかしながら、本研究の分析対象が日本全国の困難な歴史を展示する博物館の「他者」の類型を扱っているわけではないことを断っておきたい。

(執筆：金鍾成)

IV. 困難な歴史を展示する博物館の分析

1. ホロコースト記念館

ホロコースト記念館（以下、本博物館）は広島県福山市御幸地区に位置する、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害を扱った記念館である。

本博物館のメッセージは、アンネ・フランクの実父であるオットー・フランクの言葉でもある「アンネをはじめ150万の子どもたちに、ただ同情するだけではなく、平和をつくるために、何かをする人になって下さい。」である（ホロコースト記念館パンフレットより）。本博物館は、オットー・フランクと交流のあった当地の神父・大塚信らの尽力により開設された。こうした経緯から、本博物館のメッセージはオットー・フランクの言葉を象徴的なものとして扱っていると推察される。

本博物館で出会う「他者」は、ホロコーストで犠牲になった600万のユダヤ人の中でも、アンネ・フランクに代表される150万の子どもに焦点があたっている。学習者をその「他者」に出会わせるために、本博物館は、①「平穏な生活を送ってきたヨーロッパのユダヤ人たちは、ヒトラー率いるナチス・ドイツにより平穏な日常を奪われ」、②「迫害が強まる中、アウシュビッツをはじめとする強制収容所に連行され囚人生活を余儀なくされた」結果、③「150万の子どもたちが命を落とした」という語りを軸に展示を構成している。

なお、ホロコーストの犠牲となったユダヤ人と学習

者をより鮮明に出会わせるために、本博物館では多様な「現実」が展示されている。前述の①から③の「語り」と対応させると次のように整理できる。

- ①ユダヤ人家族の平和な日常の一場面を写した写真や、当時流行した「ユダヤ人迫害すごろく」、実際のゲッターで使われていたレンガを用いて再現されたゲッターの壁などをとおして、古くからマイノリティであったユダヤ人たちの平穏な生活が徐々に脅かされていく様子と対面する。
- ②ユダヤ人らが実際に着用していた強制収容所での囚人服や、アウシュビッツ強制収容所内部を捉えた記録映像から、ナチス・ドイツにより人間らしい生活や生命を奪われた数多くのユダヤ人たちと対面する。
- ③「記念室」に展示された、とある犠牲となった子どもが実際に履いていた靴、命を落とした子どもたちが履いていた靴が積み上げられた様子を写した写真、ホロコーストで犠牲になった子どもたちの生前の写真をおと、平穏な日常を奪われた罪なきユダヤ人の子どもたちと対面する。

上述した本博物館の展示からは、学習者として子どもを意識したレトリックを見出すことができる。このレトリックは、1995年に日本初のホロコースト教育センターとして開設されて以来、人権教育や平和教育の場として福山市や隣県・岡山県の児童・生徒たちを受け入れ、教育活動も展開している本博物館の性質と深く関係している。

展示方法に目を向けると、展示品のキャプションに平易な言葉や振り仮名が使われている。また、展示内容も本博物館でしか目にできないもののみならず、教科書等で見慣れたものも多く選択されている。これらは、Rose (2016) が強調する困難な歴史と初めて出会う際に抵抗を最小限にするための工夫を意味する「快適な入り口」(Comfortable Entrance) の一種だといえる。快適な入り口を追求する本博物館の方針は、「あまり暗いものになり過ぎないように、見終わった子どもたちが、平和への明るい希望を持つことができるように努力しました」という本博物館のホームページの一文にも表れている。

子どもを意識したレトリックは、展示の語りの構造にも見られる。本博物館の語りは、社会の中である程度合意された困難な歴史の語られ方として理解できる「愛らしい知識」(Lovely Knowledge) (Pitt & Brizman, 2003) にもとづき構成されており、本博物館の「現実」はこれに共感させるものが選択されてい

る。来館者に愛らしい知識としてのホロコーストの受難を伝達し、これからの平和な社会の構築を考えさせる点で本博物館の語りの構造は意義がある。

意識的に作られた快適な入り口と愛らしい知識を軸にしたホロコーストの再現は、「ケアリングとしてのエンパシー」(パートン・レヴスティク, 2015) にもとづく社会参加や社会構想を促すことにつながるだろう。

(執筆: 大岡慎治)

2. 福山市人権平和資料館

福山市人権平和資料館(以下、本博物館)は、広島県福山市福山城公園の一角に建設され、1994年に開館された。本博物館は、就学前の子どもから高齢者まで、幅広い年代の人々が訪れている。

本博物館のメッセージは、「私たちの生活にとって、同和問題をはじめとする人権問題の解決と世界平和の確立は、最も基本となる大切なこと」(福山市人権平和資料館, 2016)である。なぜなら、本博物館について「生命の尊厳と人類の共存を基本とする恒常の平和の維持、何人も犯すことのできない永久の権利である基本的人権の尊重、市民本位の行政の推進について理解をえるための学習施設であることが第一の役割」(福山市人権平和資料館, 2016)と述べているからである。このメッセージを伝えるために、1階展示室の「再びくり返すまいこのあやまち」(平和部門)と2階展示室の「人権文化が根づいた社会をめざして」(人権部門)に分けて展示を行っている。平和部門では、福山空襲、戦時下のくらしや平和非核都市宣言などについての展示、人権部門では、部落差別、戦争と人権、人権啓発と住民学習会などについての展示を行っている。本博物館が人権と平和を同時に扱うのは、平和であることが人権を保障することにつながると考えられているからである。

本博物館では、それぞれの部門において異なる「他者」が描かれている。平和部門においては、福山空襲の犠牲者、福山市における戦時下の悲惨な暮らしを経験した人々、15歳で少年飛行兵を志願し戦死した少年、原水爆禁止運動に関わる福山市民と出会う。人権部門では、部落差別の被害に遭う人々や部落差別反対運動を行う人々、戦争によって人権が無視された人々と出会う。

各部門の展示においては、様々な「現実」によって「他者」と出会う。まず、平和部門では、福山市戦災死没者慰霊像(母子三人像)が展示されている。そして、福山空襲の実相として、被災状況表や空襲予告ビラ、米軍資料に見る福山空襲、福山に投下された焼夷弾二種類(現物)、戦時下の衣服、鉄帽、水筒などが

展示されている。ここでは、特定の個人に焦点化することなく、福山空襲などの犠牲者と出合わせようとしている。加えて、平和部門の終結部における展示では、「再びくり返すまいこのあやまち」と題し、原爆・福山戦災死没者慰霊式や原水爆禁止運動、平和非核都市福山宣言の原文などが展示されている。これらによって、平和に向けて行動を起こした市民と出合わせる。

次に、人権部門では、部落の歴史と解放のあゆみとして、江戸時代の身分制度、差別墓石、民衆の暮らしから水平社運動の広がり、高松差別裁判糾弾、同和対策審議会答申などが展示されている。これによって、部落差別の被害に遭う人々と出合わせようとしている。さらにそこから、広島県東部解放運動の足跡として解放委員会福山支部結成大会や福山地裁結婚差別裁判闘争、宿毛結婚差別事件、広島結婚差別事件などを展示することで部落差別反対運動に関わった人々と出合わせようとしている。人権部門の展示の終結部では、識字学級や生活を綴る様子の写真、福山市がめざす人権施策などを展示することで人権を獲得していく人々と出合わせようとしていると捉えられる。

では、本博物館の展示からどのようなレトリックが見出されるのだろうか。それは、学習者による困難な歴史の倫理的再現を促すレトリックであると考えられる。本博物館の展示は、それぞれの部門において被害の様子から権利を獲得していく様子へと展示が構成されている。例えば、人権部門では、部落の歴史によって被害の様子を展示し、部落差別反対運動や裁判闘争によって、権利を獲得していく様子を展示していた。このように、被害の様子から権利を獲得していく様子へと展示することによって、人権と平和が大切であるという博物館のメッセージを捉えさせている。このメッセージを認識した学習者は、困難な歴史に対して省察、再考し、どのような倫理的再現を行う必要があるのか思考するのではないだろうか。

(執筆: 和田尚士)

3. 戦争と平和の資料館 ピースあいち

戦争と平和の資料館ピースあいち(以下、本博物館)は、愛知県名古屋市長東区に位置し、2007年にNPO平和のための戦争メモリアルセンターによって設立された博物館相当施設である。

本博物館のメッセージは、「希望を編みあわせる」である。この「希望」とは、「これまで平和を願って死んでいった」人たち、「いま平和をつくるためになにかをしようとしている」人たち、「わたしたち」の3者の希望を指す(ピースあいち, 2017, p.1)。本博物館では、第1展示「愛知県下の空襲」、第2展示「戦

争の全体像・15年戦争」, 第3展示「戦時下の暮らし」, 第4展示「現代の戦争と平和」の4つの展示をとおして前の2者の「他者」と出合わせ、「いま、私たちに何ができるか」を考えさせようとしている。

本博物館において出会う「他者」は「これまで平和を願って死んでいった」人たちと「いま平和をつくるためになにかをしようとしている」人たちである。前者とは第1展示から第4展示をとおして、後者とは第4展示をとおして出会う。

前者は各展示において異なる。それぞれ、第1展示では愛知県における空襲の犠牲者、第2展示では15年戦争におけるアジアのすべての犠牲者、第3展示では戦時下で暮らした人々、第4展示では20世紀以降における世界中の平和運動の活動家となっている。そして、第4展示における「他者」は現代の活動家にいたり、後者と接続する。

各展示においては様々な「現実」や「語り」によって「他者」と出会う。第1展示においては、愛知県各所での空襲被害の写真が並ぶ。そして、「証言」と題された県下各所の空襲の生存者による回想という「語り」が、本展示の「他者」である空襲の被害者として一層出合わせる。その一部は被害者の顔写真も含み、空襲被害の写真のみでは出会うことが難しい、ひとりひとりの犠牲者と出会うことを促している。

第2展示においては、満州事変から敗戦にいたるまでの15年戦争の経過が示されると同時に、写真・絵画、史資料、犠牲者数などの「現実」が用いられた「慰安婦」や南京大虐殺などのパネルをとおしてアジア全域における犠牲者と出会う。そして、「命の壁」と題された大型の組写真には、「中国民衆」を含む様々な死に関する写真が展示され、中央に示された「眼をそらさないでください—これが戦争です」という文言がアジアのすべての犠牲者と出会う、向き合わせる装置となっている。

第3展示においては、当時の人々が使ったり身につけたりしたものやそれらによる当時の部屋の再現という「現実」をとおして、より戦時下で暮らした人々を身近に感じさせる展示となっている。さらに、展示の後半には主に愛知県で戦争に抵抗した人々とその言動が紹介され、第4展示において出会う「平和をつくるためになにかをしようとしている」人たちに接続する。

第4展示においては、20世紀以降の戦争と平和運動が写真を付した年表によって示されている。活動家の写真は現代にいたるにつれて、ガンジーやキング牧師のような偉人から大衆へと移り変わっており、「これまで平和を願って死んでいった」人たちから「いま平和をつくるためになにかをしようとしている」人たち

へと出会う、「わたしたち」を考えさせる展示となっている。

以上の本博物館の展示から、3点のレトリックを見出すことができる。1点目は、出会う「他者」の順序である。本博物館は、来館者に戦争と平和について考え、行動できるようになってほしいという思いを抱いている。そのために、まず犠牲者と出会う、そして平和をつくるために行動した人々、行動している人々と出会うという順序にし、その実現を図っている。特に、最後の展示としての第4展示が、戦争は過去のものではないこと、そして「わたしたち」も平和の創り手となれることを強く示唆している。

さらに、本博物館では出会う犠牲者にも順序性がある。はじめに出会う犠牲者が愛知県下の犠牲者であることは、本博物館が位置する文脈を踏まえたものであり、来館者の心理的な抵抗感を抑制するものであるといえ、Rose が提唱する「快適な入り口」(Rose, 2016) に合致するものである。

2点目は、「他者」ひとりひとりが見える「現実」の選択・集中である。特に、第1・2展示において出会う犠牲者という「他者」は、そのひとりひとりを認識できるように展示されているものがみられた。これにより、学習者は誰と出会う、向き合っているのかが明瞭になり、本博物館においては、学習者に戦争と平和について考える必要性をより感じさせる役割を果たしたといえる。

3点目は、言葉の表現の選択である。終戦やアジア・太平洋戦争ではなく、敗戦や15年戦争という言葉を用いていることや、慰安婦には括弧が付けられ、南京大虐殺には括弧が付けられていないことから、本博物館がそれぞれについてどのように捉えているかを読み取ることができる。

(執筆：後藤伊吹)

4. 呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）

呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）（以下、本博物館）は、戦前に戦艦「大和」を建造し、東洋一の軍港・日本一の海軍工廠の町として栄えた広島県呉市に、2005年に開館した市立の歴史・科学博物館である。

本博物館が掲げるメッセージは「歴史を未来へ」であり、明治期以降の日本の近代化の歴史そのものである「呉の歴史」と、その近代化の礎となった造船をはじめとする「科学技術」を後世に伝えることを目的とする。博物館に入ると、10分の1サイズで精巧に作られた戦艦「大和」の模型が置かれ、その模型を中心に4つの展示がらせん階段状に設けられている。第1展

示「呉の歴史」では、幕末から戦後復興期にかけての町の歴史が、戦艦「大和」をはじめとした軍艦の開発・造船を軸に語られている。第2展示「大型資料展示室」では、魚雷や零式戦闘機、特攻兵器「回天」の実物資料が置かれ、直筆の遺書や肉声の遺言といった生々しい資料も展示されている。第3展示「船をつくる技術」に入ると、造船技術や船が進む仕組みに関する様々な体験装置が置かれ、楽しみながら現代の技術を学ぶことができる。第4展示「未来へ」では、先端技術産業として宇宙開発の様子が描かれ、科学技術の発展が人類を海から宇宙へと向かわせたことがわかる。これらの展示を通じて本博物館は、学習者に日本の歴史と平和の大切さを認識させるとともに、科学技術の素晴らしさを理解させようとしている。

本博物館で学習者が出会う「他者」は、日本の科学技術の発展に貢献・努力をしてきた人々と戦争の犠牲になった人々である。そして、この両者は相対するメッセージを伝える存在として各展示に混在している。とりわけ、その対比が明確なのは第1・2展示である。

第1展示では、日本の戦局を打開する切り札として計画された戦艦「大和」が、当時の最先端技術をいくつも結集させることで建造が可能であったことが示され、その技術と技術者が「誇り」というキーワードとともに展示されている。そこでは、当時世界最大であった反射炉が再現されて研磨技術の高さを示し、技術者の詳細な直筆メモや「大和」の製図資料が彼らの努力を伝えている。その一方で、「大和」の出撃が特攻であることを知りながら乗船した乗組員が、同郷の兵士と郷里の方角を向いて涙ながらに酒を飲んで覚悟を固めたことが日記に綴られ、敵機に撃墜され沈みゆく「大和」から九死に一生を得て生還した者の悲痛な語りも映像資料として展示される。

また、第2展示の入り口に、「ここで展示した大型資料は呉海軍工廠、広海軍工廠の技術水準の高さとこれを達成した先人たちの努力をしめすものです」とあるように、実物の魚雷やエンジン、戦闘機が展示され、ここでも技術力の高さを「誇り」として示す一方で、その高い技術力によって製造された特攻兵器「回天」に乗り込んで戦死した若者の思いが、実物の短刀や遺書、肉声を吹き込んだレコード音源をもって学習者に示される。

本博物館が伝えようとするのは、歴史や技術だけではなく、呉という町のアイデンティティである。造船の町として発展してきたこの地域のルーツを辿ると、鎮守府の設置・海軍工廠の設立に至る。それはすなわち、「大和」の建造をはじめ戦争に加担してきた町としての語りにつながる。したがって、戦後長らくこの

町で「大和」や旧海軍について語り、議論することはタブーであった（小笠原、2007）。これを解きほぐし、海軍が置かれた町としての歴史と技術の変遷を辿ることで、呉にあるからこそ伝えることができる戦争と平和の博物館が成立する。そのために用いられたレトリックは次の2点である。

一つは、技術者と戦死者という異なる「他者」を混在させ、誇りと悲哀という相対する感情を語らせる点である。第1展示にある「証言」コーナーでは、「大和の造船技術が今に生きている。あの時一生涯命やめたことが戦後に役立った」と語るかつての造船部員と、「総員2000人が涙を流して軍歌を歌い海に沈んでいった。絶対に戦争を繰り返してはならない」と語る生還した乗組員が並んで展示されている。

もう一つは、らせん階段状に繋がれた展示のデザインである。4つの展示を行き来する間に、学習者は必ず中央に設置された「大和」を目にする。それは、ある者にとっては夢や誇りを表す対象であり、またある者にとっては脅威やトラウマを想起させる対象となる。来館者を何度も「大和」に立ち返らせるこの展示デザインが、吹き抜ける窓から見える現在の造船所や海上自衛隊の艦船が停留する港の情景とともに、来館者にこの博物館のメッセージを再考・省察させる装置となっている。「大和」は誇りであると同時に平和を祈る記念碑なのだ。そこに呉という町が抱えた複雑なアイデンティティの根幹があり、その一端を学習者に触れさせることで「歴史を未来へ」繋ごうとする本博物館の意図が見て取れる。

（執筆：溝口雄介）

5. 乙亥会館「災害伝承展示室」

乙亥会館「災害伝承展示室」（以下、本博物館）は、愛媛県西予市野村町に位置する。「平成30年7月豪雨」を伝承していくことを目的としており、災害が起きた2年後の2020年に、西予市によって実際に被害があった場所に設立された。

本博物館のメッセージは、「事実を知り、学び合い、備えの先にいのちを守る」である（災害伝承展示室パンフレットより）。このメッセージを伝えるために、「ゾーン1：もとのまちの姿を知る」、「ゾーン2：あの日、何が起こったのか」、「ゾーン3：復興への歩みを体系的に明らかにする」、「ゾーン4：教訓を生かし、未来を守る当事者となる」という4つのゾーンが設けられている。この4つのゾーンをとおして、「他者」に出会い、困難な歴史である災害を繰り返さないために「私たちには何ができるのか、何をすべきなのか」について考えることのできる展示となっている。

本博物館で出会う「他者」は「平成30年7月豪雨」の被災者である。ここでの被災者には、「豪雨によって被害を受けた人々」と「豪雨後復興を目指す人々」が存在する。前者については主にゾーン1と2で、後者については主にゾーン3と4で出会うことができる展示となっている。

各展示においては様々な「現実」によって「他者」と出会う。ゾーン1においては、西予市の町並みや暮らしの風景写真などの「現実」が並んでおり、豪雨が起る前の、平穏な西予市の様子やそこで生きる人々に出会うことができるようになっている。

ゾーン2においては、文章による災害の詳細な説明や当時の状況を記録した動画などの「現実」によって、被害を受けた人々に出会うことを促している。また、ここでは、文章や動画に加え、VR・ARを活用して当時の災害の状況を体験することができるようになっている。例えば、VR専用ゴーグルを着用することで、災害当時をイメージしてつくられた仮想空間において、川が氾濫し自身に迫りくる状況などを体験することができる。このように、文章や動画に加え、VR・ARなどの「現実」を活用することによって、その場にいた人々がどのような状況に置かれていたか、どのような心情であったかについて身をもって体験することができるようになっている。

ここで特筆すべきは、ゾーン2は当時の記憶を克明にする資料や動画が含まれるため、心情に配慮した注意書きやゾーン2を飛ばしてゾーン3へ行くことのできる経路が用意されているという点である。被害を受けた人々に出会わない経路も用意されている点に本博物館の特徴がある。

ゾーン3では、復興に向けた取り組みの年表や多様な主体（地域住民やボランティアなど）の活動に関する文章や写真などの「現実」によって、豪雨後も前を向いて復興を目指す人々に出会うことができるようになっている。

ゾーン4では、過去の教訓を生かした防災減災活動の事例や実際に行われている防災減災活動の情報という「現実」から「平成30年7月豪雨」を教訓として生きる人々に出会うことができるようになっている。ここで特筆すべきなのは、被害を受けた市民の生の声が展示されているという点である。災害時に何を思ったのか、災害を踏まえて何をすべきなのかについての市民の赤裸々な声が展示されており、このような声を踏まえて「私たちに何ができるのか、何をすべきなのか」について考えられるようになっている。

以上の本博物館の展示から、2点のレトリックを見出すことができる。1点目は、出会う「他者」の順序

である。本博物館のメッセージは、「事実を知り、学び合い、備えの先にいのちを守る」であるように、「平成30年7月豪雨」について知り、教訓とし、未来に生かしてほしいという思いを抱いている。そのために、まず「豪雨によって被害を受けた人々」と出会い、そして、「豪雨後復興を目指す人々」と出会うという順序にし、その実現を図っている。

2点目は、「現実」の説得力の強さである。前述したように、本博物館は実際に被害があった場所に存在する。展示室の外に出れば、展示されている内容がそのまま風景として広がっており、「平成30年7月豪雨」を紛れもない事実として受け止めることとなる。また、VR・ARや実際の市民の声などの「現実」により、被災者の視点から災害の状況を体験したり、また、被災者の考えについて知ることができるようになっている。つまり、この場所にいた／いる人たちとしての「他者」の姿、視点、考えが鮮明にみえるような工夫がなされているといえる。このような場所の影響を受けた「現実」の説得力の強さにより、来館者が「他者」と向き合うことができる／向き合わざるを得ない構造となっている。

（執筆：露口幸将）

V. 困難な歴史を展示する博物館における教育の意味の再考

困難な歴史を展示する博物館は、埋もれていた他者を発掘し、彼らとの共存を呼びかけることに加え、どのような教育的役割をさらに果たすことができるだろうか。それは、自らをテキストとして捉え、展示の批判可能性を担保することではないか。

IV章で取り上げた全ての博物館は、程度の違いはあるものの、学習者に「他者」を出会わせ、困難な歴史とそれに関わる歴史を改めて記憶・再現する必要性を呼びかけていた。「現実」のもの、記録、写真、映像などを用いながら「他者」の「顔」を思い起こさせる「語り」は、博物館のメッセージを発信する有効な方略として働いていた。しかしながら、困難な歴史を展示する博物館は、強いメッセージ性を有しているからこそ、展示の批判可能性を担保しているとはいづらい。

上述の課題を解決するために、困難な歴史を展示する博物館は、以下の2つの改善策を試みることができると考える。一つは、批判可能性を意識した展示を構成することである。博物館の展示を一つのテキスト、すなわち過去に対する一つの解体可能な語りとして捉え、それを学習者にも共有できる展示の工夫をとおして、学習者が博物館の展示を主体的に批判的に理解す

ることを支援することができる。

もう一つは、博物館を見終わった後、博物館の語りを含んだ困難な歴史とそれに関わる歴史を改めて記憶・再現する機会を提供することである。これまでも、困難な歴史を展示する博物館は、困難な歴史とそれに関わる歴史を改めて記憶・再現する必要性を呼びかけてきた。しかしながら、その作業は学習者にゆだねられてしまい、その方法はもちろん、その機会も提供できてこなかった。困難な歴史の学習の目標が他者ととも生きる市民の育成であるのであれば、認知的・情意的なゆきぶりにとどまらず、実際に倫理的再現をしていく機会やそのための方法も提供する必要がある。博物館自らが教育プログラムをつくり、博物館の語りを解体・再構築する機会を設けるなど、博物館の教育の役割を拡張することが望ましいのではなからうか。その際に、Ⅲ章で示した困難な歴史を展示する博物館を分析する方法とⅣ章の分析事例は、困難な歴史の倫理的再現を目指す博物館の教育プログラムの作成に役立つと考える。

最後に、Ⅰ章で言及した学校教育における博物館の主體的で批判的な理解のためのアイデア（君塚，2017；金，2020；服部・関戸，2020）も、これまでの博物館の限定的な教育的役割に対する問題提起にもとづいているといえる。学校など博物館を教材として活用している多様な主体とのコラボレーションをとおして、博物館がさらに教育的役割を拡張していくことを願う。

（執筆：金鍾成）

【脚注】

1 資料館、記念館など多様な表現が用いられているが、本稿では博物館という表現に統一する。なお、本稿での博物館は歴史博物館を意味する。

【参考文献】

- ・小笠原臣也（2007）『戦艦「大和」の博物館—大和ミュージアム誕生の全記録—』芙蓉書房出版。
- ・小野創太（2021）「『困難な歴史（Difficult History）』をどのように探究すべきか—『批判的社会的アプローチ』による歴史授業デザインの変革—」『社会科研究』95, 25-36。
- ・君塚仁彦（2017）「博物館における『対話』による記憶『継承』活動の意義—ひめゆり平和祈念資料館の取り組みを中心に—」『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』68, 89-99。
- ・金鍾成（2020）「他者の語りに開かれた市民を育て

る—「広島平和記念資料館の『The last 10 feet』再デザイン」プロジェクトと「より良い『ヒロシマ』教科書づくり」プロジェクトを事例に—」『教育哲学研究』121, 10-16。

- ・金鍾成・小野創太（2022）「『困難な歴史』の教育的価値の探究」『広島大学大学院人間社会科学部研究紀要 教育学研究』3, 52-60。
- ・柴田政子（2012）「博物館における第二次世界大戦の展示と歴史教育—ヨーロッパの事例—」『国際日本研究』4, 31-42。
- ・戦争と平和の資料館ピースあいち（2017）『戦争と平和の資料館ピースあいち—開館10周年記念誌「希望を編みあわせる」—』。
- ・服部一秀・関戸宏樹（2020）「歴史教育における博物館展示の新たな活用—メタ・パブリックヒストリー学習—」『教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』25, 37-51。
- ・中村洋樹（2010）「社会科歴史学習における博物館学習の本質」『探求』21, 1-8。
- ・安川晴基（2012）「ミュージアムと集合的記憶のマップ—ドイツ歴史博物館、ベルリン・ユダヤ博物館、記録センター〈テロルのトポグラフィ—」『19世紀学研究』6, 3-21。
- ・K. バートン・L. レヴスティク（渡部竜也・草原和博・田中伸・田口紘子訳）（2015）『コモン・グッドのための歴史教育—社会文化的アプローチ—』春風社。
- ・福山市人権平和資料館（2016）『くらしを守る人権と平和』。
- ・『ホロコースト記念館 パンフレット』（2023年4月26日取得）。
- ・ホロコースト記念館ホームページ（2024年8月19日確認）（https://hecjpn.org/what_hec.html#what）。
- ・西予市ホームページ（2024年8月20日確認）（<https://www.city.seiyo.ehime.jp/kakuka/seisakukikaku/fukkoushien/7694.html>）。
- ・Epstein, T., & Peck, C. L. (Eds.). (2017). *Teaching and learning difficult histories in international contexts: A critical sociocultural approach*. Routledge.
- ・Gross, M. H., & Terra, L. (Eds.). (2018). *Teaching and learning the difficult past: Comparative perspectives*. Routledge.
- ・Harris, L. M., Sheppard, M., & Levy, S. A. (Eds.). (2022). *Teaching difficult histories in difficult times: Stories of practice*. Teachers College Press.
- ・Pitt, A., & Britzman, D. (2003). Speculations on qualities of difficult knowledge in teaching and

- learning: An experiment in psychoanalytic research. *Qualitative studies in education*, 16(6), 755-776.
- Reynolds, C., & Blair, W. (2018). Museums and 'difficult pasts': Northern Ireland's 1968. *Museum International*, 70(3-4), 12-25.
 - Rose, J. (2016). *Interpreting difficult history at museums and historic sites*. Rowman & Littlefield.
 - Segall, A. (2014). Making difficult history public: The pedagogy of remembering and forgetting in two Washington DC museums. *Review of Education, Pedagogy, and Cultural Studies*, 36(1), 55-70.
 - Simine, S. A. (2013). *Mediating memory in the museum: Trauma, empathy, nostalgia*. Palgrave Macmillan.
 - Simon, R. I. (2011). A shock to thought: Curatorial judgment and the public exhibition of 'difficult knowledge'. *Memory Studies*, 4(4), 432-449.
 - Stoddard, J., Marcus, A., & Hicks, D. (Eds.). (2017). *Teaching difficult history through film*. Routledge.

【付記】

本研究は、若手研究（22K13707）「『難しい歴史』の教育的活用に挑戦するトランスナショナル歴史対話のデザインリサーチ」の助成を受けて行われたものである。